

## 序 章

### イスラーム神秘主義とは何か？

---

マンガとスーフイズム

スーフイズムは何を語るのか？

「師と弟子」

「神の愛」

スーフイズムが映し出す「イスラームの色彩」

## 第一章

### 学問としてのスーフイズム

---

正統学問としてのスーフイズム

哲学的スーフイズムと実践的スーフイズム

## 第二章

### 師匠と弟子

---

——スーフイズムの学びのネットワーク——

スーフイズムにおける「センセイ」の重要性

## 第三章

### 西欧とスーフィー

——中東を越えるスーフィズムのネットワーク——

55

チャールズ三世はイスラーム教徒!?  
伝統主義学派とスーフィズム

## 第四章

### スーフィズムの修行(1)——心の型——

65

心を形作る

心の基本形と魂の発展

魂の発展段階

## 第五章 スーフィズムの修行(2)

### 心を練り上げる祈禱

心の探求

心の深層（ラタリーフ論）

神の本質につながる「最奥の心（アフファー）」

心と祈禱——魂の修行法と霊の修行法

ハルヴェティー教団における魂の七段階と「七つの御名の祈禱法」

ナクシュバンディー教団におけるラタリーフと祈禱法

集団祈禱とスーフィー詩

コラム スーフィズムと女性

## 第六章 心の境地（1）

心の境地の獲得

「悔悟（タウバ）」

「畏れ（ハウフ）」

「節欲（ズフド）」

「忍耐（サブル）」

世界があるがままに受け入れる——メルケズ・エフエンデイの境地

## 第七章 心の境地（2）

虚構を取り除く

「充足（リダー）」と「服従（タスリーム）」

「反省（ムハーサバ）」、「省察（ムラーカバ）」、「観照（ムシヤーハダ）」

「自由（フツリーヤ）」

「死の想念（ズイクル・アルマウト）」

## 第八章 修行者の心構え

### ——ナクシユバンデー教団「十一の言葉」——

- 『内観の法学（フィクフ・バーティン）』
- 第一の心得 「呼吸における知覚（フーシユ・ダル・ダム）」
- 第二の心得 「足元への視線（ナザル・バル・カダム）」
- 第三の心得 「自国での旅（サファル・ダル・ヴァタン）」
- 第四の心得 「集団の中の隠遁（ハルヴァト・ダル・アンジユマン）」
- 第五の心得 「回想（ヤード・キヤルド）」
- 第六の心得 「回帰（バース・ギヤシユト）」
- 第七の心得 「注意（ニギヤー・ダーシユト）」
- 第八の心得 「追憶（ヤード・ダーシユト）」
- 第九の心得 「時の知覚（ヴクーフィ・ザマーニー）」
- 第十の心得 「数の知覚（ヴクーフィ・アダデー）」
- 第十一の心得 「心の知覚（ヴクーフィ・カルビー）」

## 第九章 五功の心——神・自然・人をつなぐ修行

信仰告白——何のために生きるのか

清め——人間の業を見つめる

礼拝——森羅万象の祈り

齋戒——運命を受け入れ耐え忍ぶ

喜捨——自己犠牲の精神

巡礼——真理を求め旅へ

## 第十章 心を味わう——修行者の食卓

「教え」を味わう

メヅレヴィー教団の食事作法

メヅレヴィー教団「十八の奉仕職」

メヅレヴィー教団の料理

現代トルコ社会の食事をめぐる奉仕精神「パン掛け」

## 第十一章 武の心

——スーフイーとマーシャル・アーツ——

東南アジア——シラットとスーフイー

プラーナ（吸息法）とラーム・アリフの型

東南アジアからイギリスまで——シラット演武としての「崇拜行為」

東アジア——中国武術とスーフイー

回族の武術家たち

回族武術

171

## 第十二章 心の詩、心の音色、詩と音楽

詩と楽器

スーフイーと詩

神への賛歌

預言者賛歌

181

スーフィーと音楽  
スーフィーと楽器  
スーフィーと旋律

## 第十三章 人の心——絶望と希望——

見えないものこそ「リアル」  
インサーン・カーミル——まことの人  
不可視界のヒエラルキー  
ベクタシーの冗談話

あとがき

主な参考文献





## 序章

---

イスラーム神秘主義とは何か？

ما هو التصوف؟

人心これ危うく、道心これ微かなり。

名師を訪ね、護衛を求めなさい。そして玄き門をくぐり真機を得るのです。

劉智りゅうち『五更月ごこうげつ』（二七一一八世紀中国のイスラーム学者の神秘詩）

## マンガとスーフィズム

日本人にとってイスラームは、なかなかとつきやすいものではない。日本とムスリム（イスラーム教徒）諸国の交流の歴史は浅く、メディアで取り上げられる「イスラーム像」は中東諸国でのテロリズムや過激派と関係したものがほとんどで、映し出される映像は黒い覆面をした男やターバンを被かぶつて髭ひげを蓄えた屈強な男がアラビア語で叫んでいるおそろし気な姿である。しかし一方で、ムスリム諸国からの訪日観光客は年々増え続けており、日本で暮らしているムスリムは二十万人を超えるといわれている。「ハラール食品」など、ムスリムの生活に関する話題もよく聞こえるようになった。過去には、どこか遠くの国から来た近寄りがたい他者でし

かなかったムスリムは、今や私たちのとなりで生活している。世界的にも中東や南アジア、東南アジアだけでなく、ヨーロッパやアメリカでもムスリム人口は増え続けている。最近のイギリスの報道では、二〇二一年のイギリス国内で出生した新生児の内、最も多い名前は「ムハンマド」だったそうだ。イスラームを理解することは、もはや世界の動向を理解することと言っても過言ではない。

一方で、ムスリム諸国にとって日本はどう映っているのだろうか。中東やトルコ、南アジアは日本から地理的に遠いこともあり、大体は「日本人はみんな機械に詳しい、ハイテク社会で暮らしている」くらいの漠然とした偏見に覆われたイメージしかないのだが、あちらの若者の間でとてもよく知られている日本文化がある。マンガとそれを原作としたアニメである。筆者は現在トルコの大学でイスラーム学を専攻する学生たちの前で講義を行っているのだが、休み時間に学生と日本の話題になると必ずマンガとアニメの話が出る。「キャプテン翼」は言わずもがな、『美少女戦士セーラームーン』や『名探偵コナン』、『ちびまる子ちゃん』などいろんなマンガの名前が飛び交うが、特に『NARUTOーナルトー』、『ONE PIECE』などの「少年マンガ」が非常に人気である。現在は『鬼滅の刃』や『進撃の巨人』といった作品が有名なようで、私に向かって「心臓を捧げよ」と『進撃の巨人』作中のセリフで挨拶してくれ

る学生もいる。

筆者が学生時代にトルコに留学した二〇一〇年の時点では、『NARUTO』が一番の人気だった。『NARUTO』が有名なのは、なんとなく海外で受けのいいニンジャを扱っているからだろうくらいにしか思っていなかったのだが、周りの日本マンガ好きのトルコ人学生と話していると、どうもそれだけではないことに気がついた。少年マンガの中で描かれるストーリーやキャラクターの成長物語は、イスラームの伝統的価値観に近いものがあるのだそう。トルコ人学生のルームメイトが言うには特に「スーフイズム」と呼ばれるイスラームの精神文化と多くの共通点があるという。

日本にとってイスラーム文化はまだまだ遠い存在であるが、ムスリムは実は日本をマンガという媒体を通して非常に親しみを持って見ているのである。では、トルコ人が日本のマンガとの共通点を見出した「スーフイズム」とはどのようなイスラームの精神文化なのだろうか？

スーフイズムはアラビア語「タサウウフ」の英語訳で、日本語では「イスラーム神秘主義」と訳されることもある。イスラームにおいて基本の六信五行（六信は「アッラー、天使、啓典、預言者、来世、予定」の信仰箇条、五行は「信仰告白、礼拝、喜捨、断食（齋戒）、巡礼」の義務行為）に加えて悟りを得るための特別な修行や思索を重ねる人たちが「スーフイー」と呼び、彼らの



イスタンブール、メヴレヴィー教団の修行風景

著者撮影

哲学や修行の総称を「タサウウフ（スーフィーになること）」と言う。英語訳ではイズムをつけて「スーフィズム」という訳語が当てられるようになった。イスラームの共同体は現在大まかに言って「スンナ派」と「シーア派」に分かれているが、スーフィズムは両者どちらにも存在し（シーア派ではエルファーンと呼ばれる）、哲学や倫理・道徳、修行論など、さまざまな角度から人間の内面に迫るイスラームの精神的営みである。またスーフィーはペルシア語でダルヴィーシュとも呼ばれる。日本と比較的よく知られているスーフィーは、トルコのコンヤで栄えていた旋回舞踏教団（正しくはメヴレヴィー教団という修行集団）であろう。真っ白な修行服に身を包み、片手は天を指し、もう片手は胸に置きながら弧を描き踊る神秘修行である。あるいは、哲学に詳しい方であれば、日本が誇る碩学<sup>せきがく</sup>井筒俊彦が東洋哲学の深淵<sup>しんえん</sup>として紹介したイブン・アラビーの神秘哲学をご存じだろうかこれも、スーフィズムの一端である。

スーフィズムは決して過去の遺産ではない。トルコを例に挙げれば、トルコ共和国成立後の世俗主義政策によってイスタン



左はスーフィー教団の導師ザーヒド・コトク、右はエルバカン

スーフィー教団の導師たちの動向は、近年議論の的となっており、スーフィズムは、個々人の精神的営みであると同時に、社会全体を大きく動かす政治思想運動でもある。

ブルに存在したスーフィー教団の修行場（トルコ語でテッケという）は一九二五年に閉鎖されたものの、個々人の活動として民衆の間で密かに受け継がれてきた。トルコの政治家で首相にもなったネジメッティン・エルバカン（一九二六—二〇一一）が、実はスーフィー教団の熱心な修行者であったことはトルコ国内では公然の秘密であった。エルバカンの師匠であったスーフィー教団の導師ザーヒド・コトクは、現在のエルドアン政権の中心的支持層であるイスラーム保守派の精神的基盤を作り上げたことでも知られている。厳格な世俗主義政策によって公共圏でのイスラーム教育や活動を厳しく管理しているトルコ共和国において、そのカリスマ性によって市民感情を動かし政治にも影響を及ぼす力を持ちうるスー